

現場ではたらき、現場にはたらく

—仏教の言葉を学ぶということ—

親鸞仏教センター嘱託研究員 田村 晃徳

(発表概要)

「現場」という言葉は不思議なニュアンスがある。それは「現場」とは「体を動かし、その仕事を支えている人や場所」を指すということだ。法事をすることは住職の現場であるが、読書はそのようには思われまいだろう。また、私は保育園の園長であるが、保育の現場と言えば職員室にいる私ではなく、クラスで子どもたちと生活している保育士を思う。しかし、読書は住職にとり欠かせない時間であるし、職員室での書類作業が保育園を支えているのである。現場は目に見えるはたらきと、見えないはたらきで構成されている。確かに体を動かすのも「はたらき」である。しかし仏教を学んだ結果、現場を見る目がかわるのも言葉の「はたらき」によるだろう。そのように、仏教を、あるいは宗教を学び、その言葉を知るとは現場へのはたらきを生む。学びにより、同じ現場でも以前とは見方が変わる。それは「現場の再構成」とも言えるだろう。宗教者と現場というテーマに即して、仏教を学ぶことの意味を仏教者の言葉を用いつつ、考えてみたい。

自己紹介をかねて—私が抱える現場—

①お寺

- ・法事（お通夜、葬儀、年忌法要、法事案内葉書など）
- ・ご門徒との協働の場（歎異抄学習会、同朋の会、専照寺報作成、世話人総会など）
- ・ご門徒からの相談など（お墓のことなど）
- ・社会的活動（おてらおやつクラブ、大人絵本の会、）
- ・他のお寺との協働（茨城二組、東京教区慶讃法要委員など）
- ・一般の方に仏教を伝える活動（カルチャースクール講師予定）

②保育園

- ・社会福祉法人理事長、保育園園長としての活動
- ・理事会、評議員会開催
- ・子どもの安全、安心を守るための諸活動
- ・職員の勧誘、定着、成長をはかるための園運営の工夫。
- ・職員からの報告や悩みを聞く。

- ・後進の育成（実習生受け入れなど）
- ・運営費などを得るための書類作成など
- ・当園が行っている、真宗保育の全国組織である大谷保育協会での活動（常務理事、真宗保育研究所所長、東京支部支部長、各種研修会での講師）
- ・社会福祉関係での地元日立市との仕事（子ども会議委員、民生委員任命委員、など）

③親鸞仏教センターでの研究員活動

- ・担当研究会開催（英訳『教行信証』研究会）
- ・担当業務の遂行

現場を持つことの大切さ→現代の諸問題に直に触れることができる。特に保育園で顕著だが、少子化、家族形態の変化、保育士にかかる諸問題など、ニュースで出てくるのが、間近に起きている。それを経験することは、問題と自分がつながる点で、大きいだろう。お寺でも同様であり、ことに未婚化、後継者の問題、都会への人口移動などは日々感じつつの法務である。そのような中でお寺や保育園のありかたは考えざるを得ない。自身の生活とも関係する。

しかし、このように書いていてふと思う。「現場」とは何だろう、どこにあるのだろうか。

与えられる認識

- ・「宗教者」とは誰か

私は宗教者か。外から与えられた存在役割。宗教者という人物を設定することにより、生まれてくるイメージはどのようなものか。

- ・「現場」とはどこか。

「現場」を「知らない」という表現。現場とはどこにあるのか。→現場の固定的イメージ。汗を流し、働く場所。あるいは働く人。

- ・しかし、誰にとっても一様の現場はない——「私」にとってのこの場所——その人の行為、業により見ている風景が異なる。例えば保育園での子どもの見方。

現場は変わる

現場は人と環境の相互作用

・認識が言葉を生むのではなく、言葉が認識を生み、増大させていく。認識、あるいは事象の定義はどのような言葉を与えられるかで変わる。

狭義の現場・広義の現場

・住職の現場、園長の現場、そして私の現場。これらはバラバラか。それとも私の一側面か。

・狭義の現場→職場であり、他者と出会う場所。私で言えばお寺の法務であり、保育園での園長職であり、親鸞仏教センターでの研究員活動である。

・しかし、現場とはそのように限られた場所だけではないだろう。その認識が、現場に偏った認識を生んでいそうである。

・ならば、広義の現場、詳しくは「宗教者にとっての広義の現場」はどのように設定することは可能だろうか。

・それは、「生」そのものを「教え」と「学び」、そして「育ち」のある場所として、「宗教者の現場」と捉えることはできないか、という問いとなる。

現場をつなぐもの—学びと言葉—

・自分でもたくさんの現場を持っているな、という思いはある。(娑婆世界は書類でできているのかと思うこともある)。行政の会議などもあるから、仕事の種類で考えると数多くなるだろう。それぞれに特性ある現場である。数種の仕事をこなすと考えるとそれらは連関を持たない多くの現場となるだろう。

・しかし、それらは私の中では対立はしていない。それは、どの現場も「学び」、詳しくは「人間を学ぶ場」であると、自分で決めているからだ。そして、その人間を学ぶ方法が仏教なのである。つまり、私にとり現場とは仏教を通じ、人間を学ぶ場全てがそうなのである。譬えてみれば各種現場は車輪のスポークであり、それをまとめるハブが仏教の学びであろうか。その連結でタイヤが回り、日常を進めていくイメージである。

・この場合の学びにはテキスト読解がまず入る。現場の怖いと所は何か。それは学びがなくとも、進んでいくことである。子どもと遊び、書類を書いていると一日が過ぎ、一年が過ぎてゆく。それでも、時は順調に進んでくれるのだ。これが怖い。私の場合はテキスト、つまり聖教を読むことは、流されていく自分に抗う

ことである。

・もちろん学びはテキストだけではない。現場での経験がテキストの読みを深めることもあるだろう。現場とテキストは相互循環する。

言葉を知ること——認識の転換を生む

・たとえば「観仏本願力 遇無空過者」という言葉が世親の『浄土論』にある。ここの「空過」という仏教語を知ることにはどのような意味があるだろうか。「空しく過ぎる」ことは、現代もキーワードだろう。しかし、この言葉が4, 5世紀に生きた世親菩薩により語られていたことが重要ではないだろうか。人は、時代や国を問わず「空過」するのである。そこから、どのように脱却できるのか。この問いに答えてきたのが浄土教ではないか。

・「空過」という言葉を知っただけで、日々の自分の働き方がいかに「空過」であるかを認識することができる。言葉は認識である。この言葉がなければ、私は忙しいだけの日々だったろう。形無き日常に形状をあたえるのが言葉である。「空過」している自分を教わるということである。

・しかし、「空過」、つまり「空しく過ぎる」ことを悲しむだけならば、別に仏教語を用いずともよいだろう。「仕事の意味が見いだせない。空しい」という感想があり得る。仏教の言葉はその奥の目線を与えることに意味がある。ここならば「観仏本願力」＝「阿弥陀仏の本願力にであうならば」という言葉と一体での現実理解である。これは、理解できるか否かはともかく、仏教、浄土教ならではの視点である。この仏教ならではの視点が現場に注がれるのが重要なのではないか。私はこの現場で得た感覚をもとに、もう一度聖典の言葉を読むことができるのである。

・現場の認識が変わる。それは「働く現場」に「言葉がはたらく」からである。

・それは現実世界とは仏教語、つまり釈尊の言葉がはたらいている現場であるということだ。仏の目から見た言葉だからこそ、人間とは異なる目線で現実を言い当てることのできるのだろう。

・保育園についていえば子ども観がそうである。子どもについては「純粹無垢」という表現をはじめ、色々あるだろう。しかし、私は子どもたちが笑い、泣き、怒り、喜び、要求し、時にはずるいこともし、けんかをして、仲直りするといった日常の生活を見ていると、次の表現しか思いつかない。それは「煩惱成就の凡

夫」である。

・この言葉で現場を見ると何が生まれるか。それは同朋としての意識である。ここにも私と同じ煩惱成就の凡夫がいると。この言葉があることにより、園長→園児、あるいは「教える人（先生）」「教わる人（子ども）」といった上下関係、役割関係ではなく同朋という同じ関係に立つことができる。

・つまり、仏教の言葉を学ぶことは、現場の現象のみにとらわれることを防いでくれる。それは現場の関係や人間観に厚みを与える。『大無量寿経』やティリッヒの言葉を用いれば、現場を構成する「深み」に気づくといえよう。

・このように仏教を学ぶことは、私にとり「現場の再構築」をさせてくれるのである。

何のために学ぶか—伝承と継承—

・仏教を学ぶ理由を考えると、私はいつも歎異抄の言葉を思い出す。

まことに、このことわりにまよえらんひとは、いかにもいかにも学問して、本願のむねをしるべきなり。

学問せば、いよいよ如来の御本意をしり、悲願の広大のむねをも存知して、いやしからん身にて往生はいかが、なんどとあやぶまんひとにも、本願には善悪浄穢なきおもむきをも、とききかせられそうらわばこそ、学生のかいにもそうらわめ。

『歎異抄』第12条の言葉である。先にも出てきた「本願」。この「むね」を知ること、そして伝えることが学問の理由であると説くこの言葉が、私の指針となっている。それはこれまで大切にされてきた言葉に私が出会えたことによる。そして、私はその言葉をご門徒や子どもたち、そして職員に、つまりは同朋達に伝える現場にいることを知る。それは、宗教者の現場とは、言葉——そしてそこから惹起される生き方——の伝承と継承であると言えるだろう。

・もし私が皆さんと異なる環境にあることを挙げるのであれば、一週間の内にゼロ歳から90歳まで話すこと。あるいは誕生の報告と、亡くなった報告を同じ週に聞くことなどだろう。そのような命の諸相を感じる現場に本、願はどのように届く、あるいは届けることができるだろうか。ちなみに、私は心の中で自園の理事長は阿弥陀、園長は釈尊、主任は親鸞と考えて、創立2500年と呼んでいるが、誰にも話したことはない。そのような教えが流れている中で、子どもたちや大人

達が育っていることを嬉しく思う。

清沢満之の言葉より

明治期の哲学者にして浄土真宗の僧侶であった清沢満之はつねに現実を相手にしていた方だった。「世に処する」ために、宗教はどのような働きをなすか、ということが施策の中心であった。その時に私が大いに参考としたのが「天命に安んじて人事を尽くす」（「転迷開悟録」）である。現場をやりとげるには何が必要か。わかるかどうかはともかく、この言葉を与えられることで、思索の方向性ができることが大切なのだ。

「落在者」

清沢のこの言葉も重要である。人は自分の生まれる境遇を選ぶことはできない。その自分で選んだのではない境遇—落在する者—として、どのように生きていくのか。そのことを清沢は教えてくれる。

最後に私が現場の保育者から学んだ、大切な言葉を紹介したい。保育士に「真宗保育ってどう思う」という何気ない質問に以下のように答えてくれた。

「こんな私はまだまだだな、こんな私でもいいんだな。ということ教わりました」

私はここに二種深信的な自覚が生まれていたことに驚くのである。現場は環境と人間の相互作用である。言葉がはたらく現場において、人は育っていくのである。